

令和4年度

I 国語

(9時00分～9時50分)

注 意

- 問題用紙は4枚（4ページ）あります。
- 解答用紙はこの用紙の裏面です。
- 答えはすべて、解答用紙の所定の欄に、文、文字などで答えるもののほかは、ア、イ、……などの符号で記入しなさい。
- 解答用紙の [] の欄には記入してはいけません。

I

注意

字数指定のある問題の解答については、句読点も字数に含めること。

一 次の1、2の間に答えなさい。

1 次の各文中の——線をつけた漢字の読み方を、ひらがなで書きなさい。

また、——線をつけたカタカナの部分を、漢字に直して書きなさい。

(1) 気持ちが紛れる。

(2) 諭すように話す。

(3) 余暇を楽しむ。

(4) 悠然とたたずむ。

(5) 地元の企業にツトめる。

(6) 砂糖で甘みがます。

(7) 冷暖房をカンビしている。

(8) 制度のカイカクを進める。

2 次の文中の——線をつけた動詞の中で、活用形が他と異なるものを、ア～オの中から一つ選びなさい。

ア 確認したとおり、私たちは「考え」なければ、習慣的な自分から抜け出しができません。逆に言えば、「考る」とは習慣的な自分からの逸脱を、つまり他人になることを意味します。本を読むことで他人の「考え」を体験し、ノートを使いながらその「考え」に自分の思考をぶつけなければ、私たちは「自分」でない自分へと変身していくようになります。

(倉下 忠憲「すべてはノートからはじまる あなたの人生をひらく記録術」より)

一 次の俳句を読んで、あとの間に答えなさい。

A 鷹の巣や大虚に澄める日一つ

B 彼一語我一語秋深みかも

C 握ね飛ばす一枚恋の歌がるた

D 秋や今朝一足に知るのごひえん

E 不二ひとつ埋みのこして若葉かな

F 春ひとり槍投げて槍に歩み寄る

注1 大空。

注2 よくふいて表面が滑らかになつてゐる縁側。

注3 富士山。

1 情景を順に追うような言い方を用いて、ゆっくりとした動きで黙々と競技の練習をする様子を詠んだ俳句はどれか。A～Fの中から一つ選びなさい。

2 上空から見下ろすような大きな視野の先に雄大な存在を描き出すとともに、盛んな生命の勢いを切れ字を用いて表現している俳句はどちらか。A～Fの中から一つ選びなさい。

3 次の文章は、A～Fの中のある俳句の鑑賞文である。この鑑賞文を読んで、あとの(1)、(2)の間に答えなさい。

この句では、季節の移ろいを、相手との対話の中に感じている様子が表現されている。互いに交わす言葉を「□ I □」と表現しているように、この対話は活発なものではなく、

□ II □ が感じられる。またこの句は、そのような対話を引き出すことを通して、□ III □とともに季節の深まりが読み手に伝わってくる句である。

(1) □ I □ にあてはまる最も適当な言葉を、その俳句の中から二字でそのまま書き抜きなさい。

(2) □ II □、□ III □ にあてはまる最も適当な言葉を、その俳句の中から最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア □調を強めていく様子

イ □かすかにささやく様子

ウ □じっくりと語り合う様子

エ □激しく議論する様子

オ □ぱつりぱつりと話す様子

III 楽しさ

III 穏やかさ

III 静けさ

文章Ⅰ

昔さる人の云へるは、人間一万事師匠といふ物なくて叶はぬ事なり。さりながら根本の師匠をたづねもとむべし。

根本の師匠とはわが心なり。物をならはんと思ふが則ち師匠なり。さあれば我が心こそ師匠なれ。されば世間に

(そうすると)物を習おうと思ふが則ち(物を習おうと思ふが)根本の師匠をたづねもとむべし。

根柢なり。さあれば我が心こそ師匠なれ。されば世間に

師匠をする人は物毎に多けれども、ならひまなばんと(それぞの稽古ごとに)思ふ心ざしなければ、その師匠もあり申斐なし。縱ひ又

世間に、其のしなじなの師匠はまれなりとも、わが心をただしくして、もの毎に油断なく、吟味せんさくをしたしなみ候はば、その心

わが心をただしくして、もの毎に油断なく、吟味せんさくをしたしなみ候はば、その心

すなはち師匠となりて、日々にあらたなるべし。

(「可笑記」より)

思ふ心ざしなければ、その師匠もあり申斐なし。縱ひ又(なかなか見つからないとしても、念入りに細かいところまで調べて)「心がけて励むならば」

わが心をただしくして、もの毎に油断なく、吟味せんさくをしたしなみ候はば、その心

すなはち師匠となりて、日々にあらたなるべし。

(「可笑記」より)

文章Ⅱ

1 「ならはん」の読み方を、現代仮名遣いに直してすべてひらがなで書きなさい。

2 次の会話は、文章Ⅰ、文章Ⅱについて、授業で話し合ったときの内容の一部である。あとの(1)～(3)の間に答えなさい。

Aさん 「文章Ⅰ、文章Ⅱのどちらも、学ぶ姿勢について述べた文章だよね。どちらにも『心』と『師』という語が書かれているよ。二つとも似たような内容を述べているのかな。」

Bさん 「内容を確かめよう。まず文章Ⅰは、学ぶときの師匠とは『□①』そのものだという内容だよね。」

Cさん 「でも、文章Ⅱは、心を師とすると間違いを犯す結果になるという内容のようだよ。どうやら、二つの文章は互に考え方方が異なるようだね。」

Aさん 「そうだね。文章Ⅱは『須らく切磋して相起こすべき』と述べているよ。この部分を踏まえて考えると、文章Ⅱの『心を師とし自ら是とする』は、□②」という、

学ぶときに避けるべき姿勢を述べている表現なのだと思うよ。」

Cさん 「では、文章Ⅰと文章Ⅱは、どちらが正しい見方なのかな。」

「二つの文章の意見はそれぞれ視点が異なっていると思ふよ。むしろ、文章Ⅰと文章Ⅱ、両方の内容を総合して、

学ぶために大事な考え方として『□③』という意見としてまとめられるのではないか。」

Bさん 「□① にあてはまる最も適当な言葉を、文章Ⅰ（文語文）から十三字でそのまま書き抜きなさい。」

ア～オの中から一つ選びなさい。

次の文草を読んで、あとの問い合わせに答えなさい。

わたしたちが見たり聞いたものを「言葉で表す」として、うまくいかないという経験は多くの方がもつておられるのではないでしょか。たとえばわたしたちは自分の気持ちを「はればれとした」とか「うきうきした」といったことはで言い表したり、お茶の味を「まろやかな」とか、「うまみがある」といったことばで表現したりします。しかしそのような表現で、自分の実際の感情やお茶の味を十分に言い表すことができるでしょうか。たとえば「まろやかな」という表現を、「味が穏やかで」「あたりがよい、そして深い味わいが感じられる」といった言葉で説明することはできます。しかしその「深い味わい」がどのような味わいなのかをさらに説明しようと、「言葉に窮することになります。

「言葉は、たしかに、わたしたちが経験するものの一面を言い表し、他の人に伝えます。しかしそれはわたしたちが実際に経験していることの一部でしかありません。言葉による表現は、経験的具体的な内容をある断面で切り、その一断面で経験全体を代表させることに喻えられるかもしれません。その一断面からあらためて経験の全体を眺めたとき、両者のあいだに大きな隔たりがあります。そのあいだには無限な距離があると言つてもよいでしょう。

(第二段落)

「言葉」の語源は、「言の端」であつたと言われます。古くは「事」と「言」とは通じるものと考えられていました(言葉には、そのなかで言われているものを具体化する靈的な力が宿っているといふ、いわゆる言霊思想はそこから生まれたものでした)。しかしやがて「事」と「言」とは同じではないということに人々は気づくようになりました。言葉は「事=言」として事柄全体を言い表したものではなく、そのほんの一端を言い表したものにすぎないといふことが意識されるようになつたのです。そのためには「言の端」という言い方がされるようになつたのだと考えられています。

(第三段落)

「言葉がそのまま経験であるとは言えないのは、それがわたしたちの具体的な経験を普遍的な概念によつてひとくくりにしてしまうことと関わっています。たとえば桔梗の青^{注1}、露草の青^{注2}、都忘れの青^{注3}、それの青は独特的の色合いをもつていて、言葉はその違いを無視して、それらすべてを同じ「青」ということばで表現してしまいます。そのことによつて、個々のものがもつていた微妙な差異は一挙に背後に退いてしまいます。

(第四段落)

「言葉は、それぞれ独自のニュアンスをもつていて、既成の枠組み、言わば鉄型のなかに押し込んでいくという役割を果たしているとされています。たとえば桔梗の青、露草の青、都忘れの青、それらの青は独特の色合いをもつていて、言葉はその違いを無視して、それらすべてを同じ「青」ということばで表現できるようになります。そのためには、言葉は、この枠組みでとらえられたものが、もの自体であり、ものごとはそれによって正確にとらえられているといふ意識を、それを使う人のなかに生みだします。言葉はこの具体的な経験とのあいだにある隔たりを乗りこえることができないのでしょうか。

(第六段落)

「言葉にはまず、ものをグループ分けする働き、つまりカテゴリー化する働きがあります。そこでは、いま目の前にしているりんご、たとえば紅玉の独特的の赤い色とか、それ特有の甘酸っぱい味、あるいはそれが私の好みであるとかいつたことは問題にされません。むしろりんごと共に性質すべてのものをひとくくりにすることがその場合の唯一の関心事です。しかし、たとえば友人に「紅玉はおいしいよね」と語ったとき、この「紅玉」ということばは、その基礎的な意味を相手に伝えるだけではなく、相手がその味を知っている場合には、その人のなかに、紅玉独特の強い酸味のきいた甘さをありありとイメージさせることができます。それを言葉の喚起機能と呼んでよいと思いますが、わたしたちは「紅玉」ということばを聞いたとき、その音声越しに基盤的な意味を聞くだけでもなく、さらにその意味を越えて、このことばがもつ豊かな意味をもつて聞くことができるのです。ここに鍵がありそうです。」

(第七段落)

たしかに、わたしたちはいくらことばを重ねても、紅玉の微妙な味をことばで表現し尽くすことはできません。そこに言葉の限界があります。しかし他方、いま言つた機能によつて、その味を直接相手のなかに喚起することができます。そのような働きがあるからこそ、わたしたちの会話は、平板な意味のやりとりに終始せず、いきいきとしたものになると「言えるのではないでしようか」。

(第八段落)

(藤田 正勝「はじめての哲学」より)

¹ 次のアーオは、本文で用いられている熟語である。熟語の構成が他の異なるものを、アーオの中から一つ選びなさい。
² リンゴの品種。

³ 次のアーオは、本文で用いられている熟語である。熟語の構成が他の異なるものを、アーオの中から一つ選びなさい。

ア 両者 イ 語源 ウ 思想 エ 一端 オ 他方

- 1 「言葉」の語源は、「言の端」であったとあるが、「言の端」という表現は、言葉のどのような特徴を表しているか。最も適当なものと、次のアーオの中から一つ選びなさい。
ア ある事柄を表現する言葉は、事柄の一部分のみを切り取つて全体を表すことができるという特徴。
イ ある言葉で表現された事柄は、全体像が切り取られて偽りの形でしか伝わらなくなるという特徴。
ウ ある一つの言葉は、対応する一つの事柄とだけ通じて他の事柄を表すことができないという特徴。
- 2 「言葉」の語源は、「言の端」であつたとあるが、「言の端」という表現は、言葉のどのよだな特徴を表しているか。最も適当なものと、次のアーオの中から一つ選びなさい。
ア ある事柄を表現する言葉は、事柄の一部分のみを切り取つて全体を表すことができるという特徴。
イ ある言葉で表現された事柄は、全体像が切り取られて偽りの形でしか伝わらなくなるという特徴。
ウ ある一つの言葉は、対応する一つの事柄とだけ通じて他の事柄を表すことができないという特徴。
- 3 次の会話は、「枠組み」について、授業で話し合つたときの内容の一部である。会話を読み、あとの(1)、(2)の問い合わせに答えなさい。

- Aさん 「既成の枠組みに押し込めるとは、つまりどういうことなのだろうね。」
- Bさん 「たとえば、犬の毛がクリーム色でもチヨコレート色でも、茶色の犬という枠組みで表すことがあるということではないかな。」

- Cさん 「なるほど。様々な犬がいるけれど、特定の枠組みに入られたことで、実際とは違う様子として表現されることがあるという考え方だね。本文から考えるとこういう枠組みの中での変化は、言葉で表現する以上は避けられないことのようだね。」

- Dさん 「それで、枠組みに取り込むことが言葉と経験の間に隔たりを生む結果になると言えるのだと思うよ。」

- Eさん 「それに、枠組みにまとめることが、意識的に物事を正確にとらえることができるのではないか。」

- Fさん 「もう一度本文を読んで、筆者の意見を確かめてみよう。」

- Gさん 「そこで、枠組みに押しこめることの作用とは、実際には様々な相を持つ悲しさも、「悲しい」ということばで表されるとき、□は無視される。」

- Hさん 「独自のニュアンスをもつていて、言葉の持つ働きを否定するための導入とする働き。」

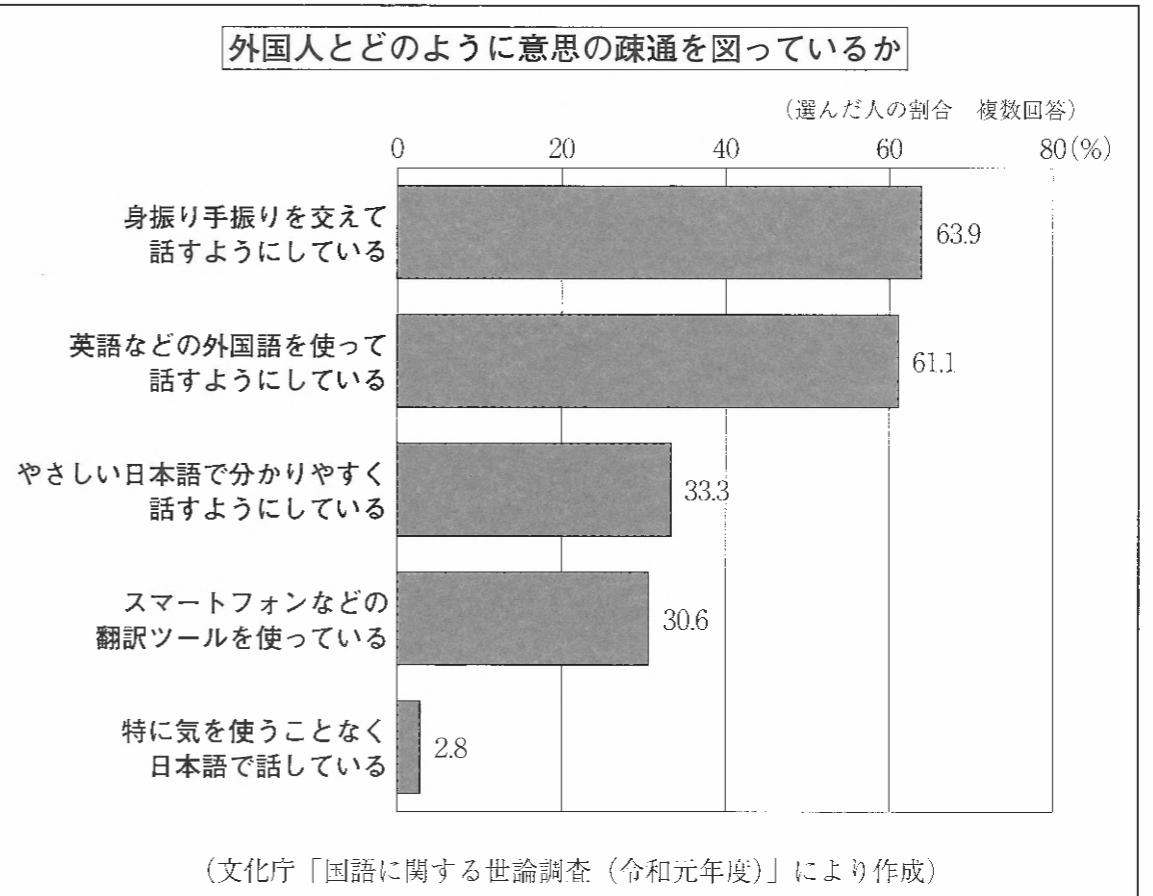
- Iさん 「言葉の定義に関する意見を抽象化した表現で示し、第七段落以降で言葉の持つ欠点を述べるための導入とする働き。」

- Jさん 「言葉の意味は使い方で変化することを示し、第七段落以降で言葉の正確な使い方を説明するための導入とする働き。」

- Kさん 「言葉の働きをまとめたものになる」とあるが、会話を「平板な意味のやりとり」にする言葉の限界と、その限界を乗りこえ会話を「いきいきとしたもの」にする言葉の働きとはどのようなことか。七十字以内で書きなさい。

- 4 本文における第六段落の働きとして最も適当なものを、次のアーオの中から一つ選びなさい。
ア 言葉の制約について整理して問題提起の形で示し、第七段落以降で言葉の発展的な特徴を述べるための導入とする働き。
イ 言葉の不合理的な特徴を複数の具体的な形で示し、第七段落以降で言葉の持つ働きを否定するための導入とする働き。
ウ 言葉の定義に関する意見を抽象化した表現で示し、第七段落以降で言葉の持つ欠点を述べるための導入とする働き。
エ 言葉の意味は使い方で変化することを示し、第七段落以降で言葉の正確な使い方を説明するための導入とする働き。
- 5 「わたしたちの会話は、平板な意味のやりとりに終始せず、いきいきとしたものになる」とあるが、会話を「平板な意味のやりとり」にする言葉の限界と、その限界を乗りこえ会話を「いきいきとしたもの」にする言葉の働きとはどのようなことか。七十字以内で書きなさい。

次の資料は、ある調査で外国人と接する機会があると答えた全国の十六～十九歳の男女に、外国人とどのようにコミュニケーションを取っているかを尋ねた結果の一部をグラフで表したものである。この資料を見て気づいたことと、「外国人とのコミュニケーションの取り方」についてのあなたの考え方や意見を、あなたの条件に従って書きなさい。



条件	二段落構成とすること。	前段では、資料を見て気づいたことを書くこと。	後段では、前段を踏まえて、「外国人とのコミュニケーションの取り方」についてのあなたの考え方や意見を書くこと。
6	全体を百五十字以上、二百字以内でまとめること。	氏名は書かないで、本文から書き始めるうこと。	原稿用紙の使い方に従って、文字や仮名遣いなどを正しく
5	書き、漢字を適切に使うこと。		
4			
3			
2			
1			

四										三			二			一										大問題
5	4		3	2	1	2		1	3		2	1	2	(8)		(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)				
オ	(2)	(1)	ア	イ	エ	(3)	(2)	(1)	ならわん	ならひまなばんと思ふ心ざし	ならわん	一語	オ	E	F	イ	改革	増(す)	勤(める)	ゆうぜん	よか	さと(す)	まぎ(れる)	正解		
オ	里美が家族のために遠くはなれた高校に進学すると決めた事情を知らずに、自分勝手な考え方をしていた	うらめしく	ア	イ	エ	部活動に対しても真剣だった里美が、いいかげんな答えを言つたから。	自分一人で学んだことを正しいと思い込む	ならひまなばんと思ふ心ざし	ならわん	一語	オ	E	F	イ	改革	増(す)	勤(める)	ゆうぜん	よか	さと(す)	まぎ(れる)	正解				
2	4	1	2	2	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	配標準			
	あればよい。	同様の趣旨であればよい。					同様の趣旨であればよい。	同様の趣旨であればよい。									とめ、はねにはこだわらず、字體字形が損なわれていなければよい。					備考				

※部分点については、各校において統一した基準を設けて採点するものとする。

六	五					大 小	問題
	5	4	3		2	1	
与えられた条件のもとで、述べられ ていること。	言葉には実際に経験したことの一部 しか伝えられない限界があるが、相手 と経験を共有することで豊かな意味 あいを伝える働きもあるということ。	ア	(2) 個々のものがもつていた微妙な 差異	(1) オ	エ	ウ	正解
6	5	2	1	2	2	1	配標準
	同様の趣旨で あればよい。						備考